
四柱と異世界の少女

緋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四柱と異世界の少女

【Nコード】

N3291Y

【作者名】

緋月

【あらすじ】

実の姉に異世界トリップさせられた桜里雫。『柱が折れそうだから、折れる前に修復しろ』という訳の分らない命令付きで。しかも、それを終えないと元の世界へ戻してもらえないらしい。何で私なの！？と文句を言いつつ楽しんでる少女の異世界冒険譚、だと思えます。

1 異世界トリップは突然に

「とりあえず、お前に任せろ。頼んだ、妹よ」
「はあ？」

多分夢の中。

真っ黒なローブを着た姉が言いました。

「んー、平凡な女子高生があの世界へ行っても何もできないな。ちよつとは能力をつけてやろう、感謝しろよ？」

「能力云々より、状況説明してよ！」

私の抗議は至極最もなものだと思うんだけど、不愉快気に眉をひそめた姉は煩わしげに一言。

「状況かあ……柱が折れるから、折れる前に修復して来いって事」

「そんなんで分かるかー!!!」

絶叫と共に私の視界は歪み、気が付いたら……。

どこぞのステージ真っ只中に放り出されてしまったとき。

観客もステージの主役らしい踊り子も目を真ん丸にして、私を見つめている。

ステージは円形すり鉢状。下方中心に演者、それを囲むようにして観客が座っている。

しかも満席。

でもステージ上に隠れる所なんてない訳で、皆の視線を痛いほど浴びる。

急に現れたから仕方がないけどさ。
うわー、嫌だ、隠れたいって思うのも無理ないでしょ。

「ではではっ、これで最後。今回は彼女にも手伝ってもらいましょ
う」

いち早く我に返ったのはピンクの髪に宝石飾りを沢山つけたアラビ
アン風衣装の踊り子さん。

手を鳴らして観客の視線を自分に集めている。

流石演者は神経が図太いなあ、なんてのんきに考えられるわ
けがない。

「は……え、何を……」

頭の中は真っ白、言葉らしい言葉なんて出てこない。

ここで冷静な人がいたら私尊敬するわ。

それに私はそんな芸達者じゃないんだもの。

私の内面を知ってか知らずか、踊り子のお姉さんには釘を刺す。

「黙って私に従ってくださいね？」

口調も顔も優しげだが、目が本気だ。あなたのせいで台無しになる
所だったのよ、と。

ものすつごく怖いんだけど……！

綺麗な美人さんだけに迫力があるんだもの。

頷く以外の選択肢なんてないわという訳で、何度も頷いて無害さを
ひたすらにアピール。

元々従う以外の選択肢なんてないんだけどね。状況も不明、動きよ
うがないんだし。

まあ、なるようになるでしょう。

順応性に関しては自信あるし、気楽に構えるわ。

「ちょっとこっちへ来て。……手を」

手を差し出す踊り子さん。

「うっ？」

私は彼女の方へ歩き、右手をその上へ重ねた。

すると、彼女は笑みを浮かべて勢いよくその手を上へ跳ね上げる。いや、綺麗な笑みだったんだよ？でも、そんなゆっくり見ている間はなかった。

「何！？嘘お……！え、ちよつ……落ち……！」

私は体ごと宙に浮いていたんだもの。

きよろきよろと周囲を見るけど青、青、青……空の青以外は何も見えない。

かなり高い場所まで飛ばされたかも。

跳ね上げる勢いがどんなに強くても普通は腕が持ち上がるだけのはず……何が起きてんのよ！？

私はふよふよと浮いたまま。

足場は不安定だし、何度もバランスを崩しそうになる。

でも、その度に横を通り過ぎる風が私を優しく支えてくれた。

「もしかして、風に意思ある……？」

まあ、その疑問に答える声なんてあるはずもないけど。

風の声なんて聞けるはずがないし、踊り子さんは観衆へのアピールに忙しい。

そもそも、自分のいる上空まで踊り子さんの声は届かないのだ。

観衆が興奮して私を指さしてるってのは分かるんだけどね。

「まあいいや。こんな経験滅多にできないし、楽しもう。そうしよう」

さくっと切り替えて、空中散歩っていうレアな状況を思い切り楽しむわ。

2 状況確認は必要だと思っただ

よく分らないうちに降りてきてと指示を受ける。

観客の反応を見ると大成功だったみたい。

コインやら宝石やらが降るわ降るわ。

でも、私としてはそんなことよりさっきの空中散歩のネタが知りた
い。

「あれ、どんなマジック？」

「『マジック』って何でしょう？」

小声で尋ねたけど、踊り子さんは何のことやら分らないらしい。

舞台上にいたからこれ以上聞くことはできなかったのが残念。

舞台を終えて、近くの宿屋へと案内された。

まあ、急に現れたんだから色々事情は聞きたいよね。

……私も何が起きたかよく分ってないんだけどさ。

そういう訳でようやく私も落ち着いて現状確認できる。

えっと、名前は桜里しずく、高校1年の16歳。

あの日も塾で疲れて私服のままベッドにパタン。

そしたら夢の中に全身真っ黒の衣装に身を包んだ姉が現れて、ステ

ージ上に飛ばされた。

何とか終わって、ピンク髪の踊り子と一緒に宿の中。

……うん、確認終了。まだ夢を見てるんだと思いたい。

指折り数えたけど、どこまでも非現実的だ。思わず逃避しそうにな
る。

まあ、踊り子の彼女がそれを許してくれなかったけど。

「さてと、あの時何で急に出てきたか教えてもらえます？」
まっすぐの視線で私を射抜く。だから、顔が綺麗だから怖いんだっ
て。

ありのまま話すべきかな？……いや、止めた方がいいわ。
自分でも信じられないことを他の人が信じる訳ないじゃない。

「分らない。何も…覚えてない」

だから首を振って泣きそうな顔を試みる。……記憶喪失ってこと
にしとこうかなって。

まあ、ここが地球じゃないことは確かだもの。

宿に来るまでに硝子のような花とか地球では見たことがない。

で、私はこの世界のことを全く知らないのも事実。記憶喪失みたい
なもんでしょう？

泣きたいのも事実だけどさ。

予想外だったのか、踊り子の女性は少し慌てた様子。

「えーっと、ホントに何も？私はベリーって言うんだけど、名前と

かは…っ？」

「名前…は、雫。……後は何も思い出せない」

力なく首を振る…演技をする。

怪しむ様子もなく、むしろ私のことを労わってくれた。

「もう今日は寝ましよう？きっとシズクちゃんも疲れて混乱してい
るのよ。次の日になったら何か思い出しているかもしれないでしょ
う？」

ベリーに無理やりベッドへ押しやられ、言われるまま横になる。

気が付いたら、白い部屋の中に閉じ込められていた。

声は反響するし、ベリーの姿はない。代わりに真っ黒いロープのお姉さんが立っている。

腕組みして偉そうに。

「夢？」

「当たり前。人がいる場所に出してやったから助かっただろう？」

「どこがよ？知らない世界で、大勢の視線に晒されて、慣れない演技やって、精神的にはぼろぼろなんだけど」

「いやじゃないか、フィードの奥地に1人で飛ばされるよりマシなはずだ」

確かに、ベリーに拾われたのは運がいい。

晩御飯にもありつけたし、宿で寝ることも出来たのだから。

でも、納得なんてできるはずないじゃない！

「フィードってこの世界よね？元の世界に返してよ！？」

「無理だな。前に言っただろう？『折れる前に修復しろ』と。お前が仕事を終えればいいだけだ」

ああもうっ、こっちが苛立ってんのに冷静に返してくるから腹が立つ！

「私には関係ない。やりたいなら姉さんがやればいいじゃないっ」

「出来るのならそうしている。神の右腕は世界に干渉できないのだ」

「は？ちよっと待って、どう言う事よ？姉さんは姉さんでしょ……」

『神の右腕』って、何？

怒りは一気にそがれ、頭に浮かぶのは疑問符ばかり。

目の前にいるのは私の姉、桜里奈津のはず。

偉そうで無理難題を私に押し付けることもあったけど普通の人間だ。少なくとも『神の右腕』とかいう、訳の分らない肩書は持っていない

い。

「世界の管理者みたいなものだ……っと、長話は不味そうだ。では、また」

そんな中途半端なところで説明を切らないでよ、と文句を言う間もなく私は現実世界に引き戻された。

3 まだまだ続くよ、状況確認

「やっと起きましたね、ここを出ますよ」
ベリーが揺さぶって起こしたらしい。

姉さんはそれに気付いたから、説明途中で去ったのかも。

「……………何で？」
でも、疑問符。

辺りは真つ暗で、空には2つの月が浮かんでいる。

出かけるには早すぎる。いや、遅いのかな？

こんな事を考えていたけど、ベリーの衝撃発言に私は今までの考えが吹っ飛んだ。

「身元がばれると不味いからです」

は？ちょっと、この踊り子さん犯罪者！？

「違います。私はどっちかといえば被害者ですよ？まあ、行きましよう」

私の心の声はしつかり口から出ていたみたい。ベリーは苦笑気味。

……………かなり失礼な事言っただけど怒らない。心が広い人だわ。

あ、もちろんちゃんと後で謝っておくよ？

道々話すという彼女の言葉を信じて、さっさと宿を出る。

宿の代金は前払いだっただから踏み倒しにはならないみたい。

よかったわ、犯罪者になるのは勘弁だもの。

しばらく、煉瓦が敷き詰められた大通りを歩く。

思ったより視界がいいのは空に浮かぶ2つの月のおかげかな。

2つの月を見ると異世界なんだ、って改めて思い出すから複雑な気

分にもなるけどさ。

「えーっと、酷い間違いしてごめん。なら、何で逃げるの？」
そもそも逃げる理由が分らない。

「ゆっくりしていると騒ぎになるでしょうから」
首をかしげる私。だって、ベリーは犯罪者じゃないんでしょ？

何で騒ぎになるんだらう。何か変な事やったっけ？あー…私が急に現れたからかな。

…でも、その時も上手く誤魔化していたような。
そんな私に気付いたのか、ベリーは続けて言った。

「魔法を使ったからです」
魔法って…もしかして、あの空中散歩の時かな？

種も仕掛けもなかったんだ、あれ。
まあ、異世界に来たなら魔法があっても不思議じゃないけどさ。
…いや、でも少し変かも。

「魔法を使ったら騒ぎになるの？何で？」

目を丸くしてそんな私を見つめるベリー。
ちよつとした沈黙後、そういえば記憶喪失でしたね、とぼそり。
それなりに納得したみたい。簡単に説明をしてくれた。

曰く、普通の人は魔法を使えない。魔法を使えるのはベリー達、ラ
ウルの民のみ。

でも、彼らは国に保護されて自由に歩くことは出来ない。
ベリーは保護地域から抜け出てきた…以上。

「見つかると連れ戻されるってこと？」

「多分そうでしょうね。…あんな檻に連れ戻されるのは御免です」
檻？保護という言葉とは反対に物騒な例えよね。

でも、聞き返してもベリーは曖昧に笑って誤魔化すだけだった。触れてほしくないなら、今は置いておこう。

正直、自分の事で手一杯なもの。

『神の右腕』って何よ、柱って何よ……！
夢を思い出すたびにもやもやするんだから……！

「シズク、何か思い出しました？」

そんな私の内面を知ってか知らずかベリーが一言。

自分への質問が落ち着いたから聞いただけかもしれないけどね。

さてと、どこまで話そうかなあ。

「……『神の右腕』と『4つの柱の修復』って言葉」

するとベリーは腑に落ちないのか、腕を組み考え込む素振りを見せた。

あれ、私変な事聞いた？……とはいっても、私は何が変かすら分らないんだけど。

「4柱ってそれ、言い伝えですよ。神話や伝説の類です」

「言い伝えってどんな？」

「世界の4隅には天を支える柱がある。それらすべてが折れたら天が落ちて来て世界が滅ぶという話です。でも、『神の右腕』については分りませんね」

思わず沈黙。

異世界の人間を呼び寄せるんだから、伝説の柱が修復対象でも不思議はないと思う。

でも、でもさ？

これをどう探せってのよ、どう修復しろってのよ……！

姉さん、私を異世界に送る前に「世界観講座」をちゃんとしてくれ
！！

思わず叫びそうになる私。何とか喉で留めたけど危なかった……。そんな時耳に滑り込んできたベリーの言葉。

「私の旅にはあてもないですし、シズクの用事に付き合いますよ」
優しい女神の声に聞こえたわ。

「本当！？ベリー、ありがとう！！」

思わず笑顔でベリーの手をがしつと握りしめた。

1人で異世界に投げ出されなくて本当に良かった……。…。

と思ったのもつかの間。後ろから男の声がかかる。

「ねーちゃん達、待てや」と。

えーっと、要するに面倒事は思ったより早くやって来たようでした。

4 まあ、こっぴど目にも遣うよな

「何の用でしょうか？」

余裕があるのか、ベリーは堂々とした様子で男を振り返る。

私はというと正反対。ベリーの陰に隠れ、こそつと声の主を見遣った。

ひよろつとした男が目に入る。まあ、夜闇のせいではっきりとは見えないけどさ。

何で陰から見てるの、とか聞かないでね？

一般の女子高生が荒事に対応できる訳がないじゃないの。

「女2人だと危ないだろ？エスコートしてやるよ」

言葉だけ紳士的でもねえ……行動はナイフを取り出しての威嚇。

せめて言葉と行動は一致させてほしいんですけど。

それにベリーもベリーだよ。

面倒事が嫌だから追手がかかる前に逃げるんでしょ？この歩きづら
い夜に出歩いてんでしょ？

何で、出て少したら引きとめられてんのよー！

しかも、返事までしてさー！

こんな感じで私の頭は軽くパニック。

それなのにベリーは相変わらず堂々と聞き返す。

「何故私たちを？……ああ、もしかして追い剥ぎですか？女の二人
旅だから、と」

肝が据わりすぎなお姉さんだわ。

あ、言っただけでなかったけどベリーは私より5歳ほど上ね。

でも、驚嘆するにはまだ早かった。

「甘く見てもらっては困ります」

次の瞬間ベリーは男に向かって振りかぶったんだ。

しかも、よくよく見ると左右の手には既に短剣を持っている。

いつの間に!?

驚いたのは私だけじゃなかったみたい。

切りかかられた男の方も目を見開いていたから。

ベリーが狙ったのは右腕。

カラッ

男の手からナイフを叩き落とした音。

ベリーが使えるの、魔法だけじゃなかったのね。

「人前で使えない物を当てにはしませんよ」

あれ、私何も言っていないはずなんだけど。

「……そんなに顔に出やすいかな？」

何も答えず、ベリーはくすくすと笑ったまま。

それでも、相手からは目を逸らさず警戒してるんだ。凄いな。

でも旅をするならこれが出来ない和不味いのかも。そう考えると少し鬱にも、ね……。

切りつけられた男も流石に我に返ったみたい。

ベリーに掴みかかるうと手を伸ばすけど、一瞬早くベリーは飛び退く。

でもその後、すぐに距離を詰めて今度は蹴りを入れる。
それが見事に相手の腹に入り、間髪いれずに同じ場所に拳が入る。
……格闘メインだったのかな、ベリーって。

ベリー優勢な戦いだから、のんきに観戦していたのだけど。

「え、なっ、嫌……っ！」

急に身体を引き寄せられた。かと思つたら、首筋にナイフ。
どうやらもう一人潜んでいて、私は人質に取られたみたい。

「おーっと、そこまでだ。こいつの命が惜しければ……」

状況や台詞から考えると、3流悪役が自分の優位を確信して命令を下す場面。

こういう時、大体は敵が墓穴掘ったり、外からの助けが来て助かるだけど。

現実でそういうのは期待できないでしょ……！
どうしよう。ホントにどうしようっ。

情けないというか、ベリーに申し訳ないというか。

「う……ごめんなさいっ……っ！」

小さくて聞こえなかったかもしれない。でも、言わずにいられなかった。

ベリーは両手の短剣を地面に投げ捨て、大人しくなっている。

……あぁ、もうホントに私の馬鹿っ！！隠れることすら、まともに出来ないなんて。

さっきまでやられていた男が大人しくなつたベリーに反撃する。

そりゃそつだよね、こんな好機逃す訳がない。甘んじて受けるベリ
！。

私のせいだ。私が捕まらなければ……ベリーがこんな目に合わずに
すんだのにつ。

悔しくて、情けなくて、でも、どうしようもなくて。

そんな時頭の中に声が響いた。

「中々いいタイミングだなあ、シズク。相手はお前に触れてるな？
なら言え。『クロノIIゲイン』と」

5 そういえば『能力つけた』って言われてた

ちよっ、何言ってるのよ！

この非常事態にのんきな声で話しかけてきたのはすべての元凶、姉さん。

『非常事態だからだよ。助かりたくないのか？変な妹だ』

姿は見えないけど、やれやれと肩をすくめているのが目に浮かぶ…

…！
私だって助かりたいよ？でも、訳の分らない事言われたら反論したくもなる。

でも…ああ、もうっ、言えはいいでしょ、言えば。どうせこのままじゃ、何も変わらないし。

という訳で、脳内会話は一旦終了。

「『クロノIIゲイン』……言ったけど一体何？」

頭に響く姉さんの声に文句を言ったけど、答えは別の所から。

「黙……え、な……何だ、何で……！！」

私を捕らえている男の声だ。

でも、おかしい。後ろから聞こえたのはしゃがれた老人の声だもの。少し強く身じろぎしたら、簡単に振りほどけた。

振り返るとそこに立っていたのはよぼよぼの老人ただ1人。

「あれ、あんた爺さんだったっけ？」

きょんとする私。一応聞いたけどさ、いやいやそんなはずはない。私を捕らえていた男はまだ若かったはず。

自分の手や腕を茫然と見ていた男は、急に叫び声を上げると慌てて逃げて行った。

混乱と恐怖、かな。

その気持ちはよく分る。……やったの私だけど。

まあ、これで私の方は何とかなった。

ふと視線をずらすと無抵抗で殴られるベリーが見える。

早く伝えなきゃ……！

「ごめん、ベリー！私の方はもう大丈夫、助かったから！」

私が叫んだら、ベリーを殴る男の動作が止まった。

普通だったらその隙にベリーの反撃があるんだろうけど、今回はベリーも硬直中。

「……何やったの!？」

振り返って、これだけ言うのが精一杯みたい。でも、私は曖昧に笑うだけ。

だって、私も何が何だか分らないんだもの。これ、魔法？

私は何も言わないから、諦めたのかな。

ベリーはさくつと切り替えて、目の前の男に反撃を始めた。

腹部目掛けて蹴りを入れ、顎を目掛けてアッパー。で、男は地面にダウン。

……うわぁ、動作が早い。というか、怖い。

戦っている最中に笑うんだよ、にやりって。戦闘狂にしか見えないよ……っ！

外見はここにいる誰より女性っぽいのに、漢だ。怒らせないように気をつけよう。

ダウンした男が起きあがった所で、お仲間さん さっき私がお爺

さんにしちゃった人 が登場。

ベリーの相手をしていた男を掴んで必死になって止めていた。

……怯えた目で私を指差して何事か喚きながら、ってというのが悲しいけど。

止められた男の方もその老人が自分の仲間だつて分かったみたい。服とか話し方から判断したのかな？意外と付き合いが長かったのかもね。

2人して恐怖の表情で私を見た後、脱兎のごとく逃げて行った。

ああ、何かすつごく悲しいわ。私は普通の人なんだよ、一応。

「あの老人は？」

「私を人質に取った人。あの時、私が老人にしちゃったみたいでさ。ねえ、ベリー。そういう魔法ってあるの？」

「人を老化の魔法？ないはずですよ。魔法は火とか水とか自然由来のものばかりですから」

今までは平凡な一般人だったし……トリップの時に付けられた能力だよ、多分。

「そっか。……これ、私にもよく分らないんだよね。まあ、助かったしいいでしょ？」

「シズクは樂觀的すぎます。でも、まあ、いいですよ、人が集まる前にさっさと出ましよう」

空が白み始めているから、早く町から出ないとね。

早起きの意味がなくなっちゃう。

私とベリーは何事もなかったかのように町の出口へと向かう。

何にせよ、フィードの冒険、始まり始まり

6 これは誰の記憶なんだろう？

数日間歩きっぱなしの私達。

「ねえ、どこへ向かってるの？」

「イルベルの町」

行き先がはっきりしないと精神的につらい。

だから聞いたんだけど、町の名前聞いても分らないや。

結局、沈黙。

「そうですねえ、簡単に言えば本の街。少し遠いからしばらくは歩きですけど」

「そっか。神の右腕調べるため……だよな」
ベリーは頷いた。

実はあの後、夢で姉と会ったんだ。たった一度だけ。

でも、言いたい事言って慌ただしく消えちゃったんだよな。

「しばらくは会えない」って言葉を最後に残して。

だから、結局『神の右腕』については何も分らなかったんだ。

さっきの能力についてはそれなりに教えてもらったけど。

……あんな緊急時じゃなくて、もっと余裕のある時に教えてほしかったよ、全く。

ぶつぶつと姉さんへの不満を心の中でぶちまけていたが、ベリーの言葉が私を現実に戻す。

「ただ、その前にこの森を抜けないといけないんですけどね」

「この森？」

「そう。近道なんですよね、ここが」

早くイルベルの町に着きたい。

だからベリーの近道という言葉に乗っかると思ったけど……嫌だ。入口がぼっかり空いて、中は薄暗くてどんよりしている。

淀んだような、不気味な雰囲気も感じるんだもの、正直怖い。行きたくない！

なのにベリーはすたすたと歩いて行く。

何で？怖くないの！？……ああ、もう、動けこの足っ！

「ベリー！ま…待ってよ！」

ようやく動いた、と思ったら後ろから引きとめる声。

本ではよくあるパターンと言えばパターンだけど。

「ここはソラニエの森。普通の人には避けた方が無難だ」

聞こえたのは低くて優しい男の声だった。

あれ、私、知って……？あ、駄目、かも……

「シズク…！？」

ベリーの悲鳴が遠くで聞こえる。

違和感の正体を掴む前に私の意識は黒で塗りつぶされた。

目の前に空が広がっている。

でも、景色は霞がかっているし、体はだるくて思うように動かない。

……残りの命が極僅かなんだね、きつと。

彼が私を抱きかかえて泣いている。ぼろぼろと雫が落ちて止まらない。

でも、私は最期だから彼に笑ってほしかった。

「笑って……いつもみたいに」

男の右頬に手を伸ばし、掠れる声で精一杯伝える。

彼は小さく頷くと精一杯の笑みを浮かべてくれた。

痛々しい表情だけど、その微笑みを最後に焼き付ける事が出来たら、私は幸せ。

でも、彼はずっとその記憶を持って暮らしていく……守れなかった記憶を、ずっと。

ごめんなさ

ぷっん。

映像は唐突に切れた。テレビの電源を切った時みたいだね。そこで唐突に『私』に戻ってくる。

さっき私は『命の残りが少ない人』になって状況を見ていた。んーと、例えるなら夢で別人になってる感じだね。

夢の中だと別人になっても気付かないでしょ？

自分とは違う思考回路なのに受け入れちゃったとかさ。

ゆっくり目を開けるとベリーが私を覗き込んでいた。で、ベリーは肩を持つてがたがたと揺さぶる。

「シズク……！？どうしたの、大丈夫ですか!？」

脳が揺れてまた気絶するわ…!

「ベリー、ごめん。何かよく分らないけど大丈夫だから」

揺さぶられた後遺症で少しくらくらしてるけどね。

まあ、正気には戻ったから大丈夫だよ、うん。

で、私の意識が戻ってこればさっきの映像って違和感しかないんだよね。

誰の記憶よ、これ。

私は瀕死になつた事もないし、あの男と会つた事も多分ない。

ああ、多分っていうのはその男の顔がしっかり思い出せないからね。

『私』の気持ちは強く感じたから覚えてるんだけど、それ以外は色も形も曖昧になつてる。

まあ、私は私だから落ち着けばいいんだけどさ。

7 案内人ゲットっ

少し落ち着いた所でまわりをぐるっと見回す。すると、男が目に入った。

白髪と杖とフード付きローブ。瞳も赤いからアルビノかな？片目が髪で隠れてるから分りにくいけど。

……まあ、要するに目立つね。いや、えーっと、私の服よりは目立たないんだろうけど。

私の服はジャージの上下だからね。……そこ、色気ないとか言わないっ！

しょうがないじゃん、着替えるの面倒だったんだもの。

「で、あー…どちら様？」

「エミ……いや、人に名前を聞く前に自分が名乗るのが礼儀だろう？」

うわ、この人、名前言いかけたのにテンプレ通りの返事に持ってっつたよ。

礼儀つても分るから先に名乗るけどさ…今まで面と向かってそう言う人に会った事はないんだよね。

正直、ちょっと面白い。

「私はシズクだよ。さっき、森に入るなって止めた人だよな？」

「そうだ、俺はエミティアス。そうだな、エミティと呼べばいい。

……急に倒れたが、どうしたのだ？」

「分らない。というか、むしろ誰か私に教えてほしいわ」

「そうか」

このエミティって人は表情も口調も淡々としている。感情も何も浮かんでないんだ。

ぱっと見は。でも、私にはこの人が微笑んでいるって分ったんだ。

……何でだろ？

「何故この森に入ったら駄目なのか、教えていただけますか？」
ベリーの声がふと現実を引き戻す。

「そうだ、この人の正体は考えたって分んない。目の前の事に集中しないと。」

「……ここはソラニエの森と言ったはずだ」

「こんな所にソラニエの森があるなんて聞いた事ないですよ？」

「違うと思うなら入ればいい。魔法を使えない者は迷って出られないだろうがな」

「ああ、それは聞いた事があります。魔法の要素が濃いからですよね？」

「そうだ。普通の人間は幻覚と気付かず森に惑わされる」

私は会話に入ってたつてついていけないもんね。

大人しく聞いて情報を仕入れよう……と、ここで1つ疑問が。前言撤回。疑問に思ったらすぐ解決するべきなもの。

「ベリーなら大丈夫じゃない？魔法使えるでしょ？」

「……シズク、むやみやたらに魔法の事はばらさないください」

ベリーは私を軽く睨むけどさ、同じ事考えてたんでしょ？顔にそう書いてあるんだし。

「ラウルの民か。……それでも確率は0%から50%に上がったよ
うなものだな」

エミティは考え込んだままだし、私とベリーは首をかしげる。

「ああっ、もう、言いたい事あるなら分りやすくはつきり言って頂戴
よ。」

……私、フィードに来てから堪え性が無くなっているかもしれない。
「今のラウルの民は外との混血だ。……森に入る資格がない。森は

お前たちを排斥しようとするだろう」

回りくどい言い方するなあ。

「えーっと、森に入れても何かに攻撃されるよ、って事？」

エミティが頷くけどさ、何かについて何によ？

目を凝らして森の中を見るけど、暗くて何にも見えないし。

「でも、この道を通らないとイルベルまで遠回りになるのよねえ」
同じように森の奥を見つめ、困り顔のベリー。

こうして見ると守ってあげたい儂げな女性に見えるんだけどねえ。

本性はあっち。あの、男たちを伸した強かなベリーの方。

……この数日間であーく分ったわ。

「イルベルに行くのか？2人で？」

私たちを交互に見るエミティアス。

「そうだよ。ちよつと調べ物にね」

神の右腕とか四柱とかそれに関わる神話・伝説とか。

……『ちよつと調べる』じゃ済まないかもしれないけど。

「俺もちよつとそつち方面だ。ならば、案内しよう。俺はここを通れるからな」

え、普通の人は通れないんでしょ？ってことは、エミティも魔力を持ってるんだよね。

でも、ベリーとは違う。そもそもラウルの民でもここを通れる確率は半分だって言ってたし……。

この人も色々謎がありそうだなあ。

まあ、いいけどね。

私たちが森を抜きたいのは確かだし、エミティがいれば安心して森に入れるみたいだし。

さくつと抜けちゃえばいいんだよ。

何にせよ1人加えて出発ということぞ。

いざ、不気味な森の中へ進まんつ！

8 ソラニエの森って何なのよ？

んで、いざ森の中。

木々の隙間から光が差し、周囲に乱反射しているのは幻想的だし。足元も草の手入れが行き届いているみたいで歩きやすいし。

空気は澄んでて気持ちがいいし。

あれ？外から見た禍々しさとは逆に結構明るくていい所なんだけど？
ちよつと拍子抜け。

「意外と綺麗な所だ……ね？」

くるーりとベリーを振り返るんだけど。

ベリーは何か酔った様子で、体調が悪そう。足元も覚束ない。

「……何で、そんなに元気……なの……？」

あ、あれ。何で？

澄んでて気持ちのいい森だよ、ね。

「お前、何者だ？」

エミティに至っては眉間にしわを寄せて私を睨んでるし。口調にも棘がある。

……何で今更警戒されなきゃならんのさ？

「私はシズク。それしか覚えてないわ。何で睨まれなきゃいけないのよ？」

「……この森がお前を受け入れた。だが、この森は柱に連なるもの、神との関係者しか受け付けられないはずだ」

柱に連なる者？神？んな事言われても、知らないもんは知らないよ。

その時、ふと姉さんの顔が浮かんできた。

姉さんは夢で姉さん自身の事を何て言ってた？

そう、確か『神の右腕』って言ってたはず。で、私に『能力

をつけた』とも言った。

神から私への贈り物……とすると、この能力は神の祝福の一種？
それなら、話しの辻褃が合う。森に拒絶されない理由になる。
気持ちのいい散策はこのおかげか……っ！姉さんサンクスッ！
私、初めてあの姉さんに感謝したかもしれない。

まあ、エミティに説明する気はないけど。

ベリーにも記憶喪失で通してるんだし。

とすれば……あー…もう考えたって無駄じゃない。

というか、そもそも記憶喪失って事にしてんだから、あーだこーだ
聞くな。

てか、聞かれても答えらんない。

「私は記憶喪失なんだから分んないものは分んないって」

「記憶喪失か、都合のいい言い訳だな」

いらっ。

……確かに都合のいい言い訳だよ？認めるよ？

でもさ、よく分らん世界に飛ばされたのは事実だし、全部が全部嘘
って訳じゃない。

それにさ。

「私以上に胡散臭い人に言われたくないんだけど」

あ。つい本音が。

エミティはさっきよりもきつく睨むし……あー、もうどうにでもな
れっ！

この際だから疑問に思った事全部言わせてもらおう。
んで、勢いで押して、強引に誤魔化すっ、うやむやにするっ！よし
っ。

「私が不審？この森に入れるからって理由で？でもそれならこの森を通れるエミティも不審だよな？その辺詳しく教えてくんなきや。大体普通は神の関係者って敬われる事はあっても、不審がられる事ってないんじゃないの？ここを通れるエミティだって神の関係者ってことになるんだし。仲間として歓迎されるなら分かるけど……睨むって何で？」

一息で言いたい事全部言いきったっ。

まあ、勢いで喋っちゃったから前後の繋がりがおかしいかもしれな
いけど。

ふっ、満足よ。

「それは……」

歯切れの悪い返事で、黙り込んでしまった。

「まあ、いいや。この話はここでお終いにしよ？」

渋々と言った様子でエミティは口を閉じる。

ベリーも口を開くのがつらそうだし……黙々と歩くだけ。

それからずっと、何時間も、ひたすら話さない。

うー…何か、沈黙が痛いというか……居心地悪い。

私、黙れって言った訳じゃないんだよ？話題を変えようって言いた
かっただけなんだって。

上手く通じなかったみたいだけ。

私が悪かったからさ、もう少し楽しい雰囲気ですこつよ……！！

「……ん？森が」

願いが通じた？あー、やっと話せるよー…。
無言で歩くって結構きついんだよね。いや、疲れてる時は無言になるけどさ。

エミティが話した事でやっとほっとできる雰囲気になった気がする。ちなみにベリーはまだ体調が悪いんだろうね、会話する余裕はなさそう。

「エミティ、顎に手を当ててどうしたのっ？」

「変だ……って、何でお前はそんなに嬉しそうなんだ。話すなと言ったのはお前だろうっ？」

「質問に質問で返さないで頂戴。……それに、私、話題を変えたかっただけで黙れとは言っていないし」

やっぱり盛大に誤解されていたみたい。

「……そうか、悪かった。森が変だと言うのは……こういう事だ」
エミティが地面を杖で示す。

え、何で？草や根っこがするすると道をあけてるんだけど。しかも私を通る道だけ。

確かに歩きやすいとは思っていたけどね……

「え、何で……!？」

「……森が呼んでいるのかもな。歩きやすい道を歩かされていた……
……徐々に誘導されていたのだろう」

「森が呼ぶって……どういう事？」

「そのままだ。人を惑わしたり受け入れたりする森だからな、意思があっても不思議ではない。……そもそも、この森の草木は動かないはずだ」

「現に動いてるんだけど」

「だから、どこかに誘導したいんだろう」

そんなもんかなあ。まあ、歩くしかないんだけど。

んで、エミティの推測は当りっばい。

別の所を歩こうとしたら草木が遮ったり、横を見たら急に湖が現れて歩けなかったり。

誘導されてる感ばりばりと言っか、エミティの言葉以降露骨になった気もする。

この森、人の言葉も分かるんじゃないの？

まあ、ファンタジーの世界だから分かるって言っても驚かないけど。

9 『力を見せる』? ……嫌なこつたっ!

しばらく歩いたら広い空間に出た。木々は一切なく、空から光が降り注ぐ、広い空き地。

そこでは草木の動きが全て止まった……? きよろきよろしながら真ん中の方まで進む私。

「ねえ、ここに呼んだのかなあ?」

でも、響くのは私の声だけ。

ベリーもエミティも返事くらいして頂戴よ。1人でぼそぼそ喋っていたら変でしょ?

2人に何か言おうと振り返ったんだけど……。

「嘘……」

そこに広がっているのは木と草だけ。人の姿がないのはもちろん気配すらない。

何で、ここにいるの私だけなの……?

さっきまで一緒にいたよね?

別にここまで走って来た訳でもないし。

私は皆より数歩前に出ていたかもしれないけど、数歩の違いで逸れるってことはないはずだもの。

ああ、どうしよう……! ちょっと混乱してきた。ちようどそんな時。

「お主が呼ばれた人間じゃな?」

何か上から声が降ってきた。

不思議な声だなあ。低い音、高い音、澄んだ音……色んな音が重なった声。

その声の方を向こうとすると……

びゅんっ。

「……っ!？」

突風に思わず顔を覆う。突風と長髪のせいでただでさえ視界が悪くなっただけどね。

で、それが収まると目の前に声の主がいたんだ。いや、いたんだけどね……。

白銀の大きな獣が。

殺気立っていないし、目も優しい。

四足に白銀の綺麗な長い毛。

もふもふしたら暖かそう。……冬には一家に一匹ほしいかも。

えーっと、さっき喋ったのはこいつかな？

でも、人間の言葉話せるようには見えない。いや、そもそも理解できるようにすら見えない。

「ふむ、だいぶこの世界に馴染んだようじゃの。……危機管理はまるでなっておらぬが」

あ、喋った。しかも、最初に聞こえた声と一緒に。

しかもさらりと結構失礼な事いわれたよね。とはいっても。

「あー、かもね。でも、凹んでウジウジするより、『珍しいっ、突撃ー』の方が楽しいじゃない？」

この世界の常識なんてまだよく分らないし。

境遇を嘆いて引っ込んでるより、好奇心のままに楽しむ方がマシでしょ？

今の私にはその元気があるんだから。

でも、そう答えた後銀狼の視線に何か呆れの色が混ざった気がする。

「相変わらず度胸だけはあるようだの。まあ、お主だしの。さて、

ここからが本題じゃ。……力を見せてもらおうか」

「は？力を見せるって？」

「相手をしてやる、と言ってるのじゃ……遠慮なくかかってこい
え、いやいやいや、無理でしょ。

1人でバトル？この銀狼と？……ありえない。即、倒されるわ。

「結構です。謹んで辞退させていただきます……ってことでっ！
ダツシユ。

……で、逃げようとするんだけど。

「ふおっふおっふお。逃げられると……ちと悲しいのう」

うわぁー……、草と木で退路塞ぎやがったよ、この獣。

表情は分らないんだけどね、意地悪く笑ってる気がする。口調がそんな感じだし。

「そう慌てるな。別に我を倒せとは言わぬ。力を示せ。柱に……世界の要に関われるだけの力を」

とか言われてもねえ。

「嫌なこったっ！『クロノIIゲイン』」

道を塞ぐ草木に向けて唱える。

でも……ぐにぐにと動いてさらに頑丈に塞いだよ。何なのさ、この生物。ああ、もう邪魔。

「『クロノIIゲイン』『クロノIIゲイン』……！」
ひたすら繰り返すけど効果なし。

嘘？何で……！言葉は間違っていないはず。徐々に焦る私。
……んで、そんな私を憐れむような目で見る獣。

可愛そうなモノを見る目で見つめないでっば。物凄い居た堪れなくなるからっ。

生温かい目で見守っていた獣がゆっくりと口を開く。

「……ふむ、時を操る力を与えたのはいいが……使い方は教えておらなんだか。その力、ただ叫ぶだけでは使えぬよ」

以前使った時、どうやったか思い出してみるのだな……とか、偉そうに。

あの時は捕まって、引き寄せられて……？どうなったっけ？
やれやれとため息交じりに答えてくれる獣。

「はぁ……。相手の腕がお主の手と触れていたはずじゃろっ」
……意外と面倒見がいいんだね。

ああ、でも、言われてみれば。引き寄せられてきつく抑えつけられ
たっけ。

だから、「放せ」って意味を込めて相手の腕を掴んだ……ような気
も。

あんま思い出したくない内容だから、漠然とした記憶しかないんだ
よね。

引き寄せられた後、姉さんの声が聞こえたっけということだけ。

「つまり、相手に触れなきゃ使えないっけの？」

「そう言う事じゃ」

「えーっと、んじゃ、木に触れてっ……『クロノIIゲイン』……
ホントだ、枯れた」

……うわ、なんて使い勝手の悪い能力。

武術とかやってれば、違ったかもしれないけどさ。私はこれまでも

つと帰宅部だよ？
どうやって使うのさ……！

「では、再開と行こうかの」
え、え……つと、私が気持ちを落ち着ける前に向かってきたよ！こ
つちの心情は総無視かつ。
どうする？いや、どうしようもない。

えーつと、まずは目の前の植物に『クロノ＝ゲイン』っ。……よし
っ、道は開いた。

とにかく逃げるが勝ちってね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3291y/>

四柱と異世界の少女

2011年12月31日00時45分発行